

現在のカーボ・ヴェルデにおけるポルトガルの影響

今村 薫

I はじめに

カーボ・ヴェルデ（正称 República de Cabo Verde, 英名 Republic of Cape Verde）は西アフリカ、セネガルの沖合 500 キロの大西洋上に位置する群島国家である（図1）。かつて無人島であったが、ポルトガル人が1456年に発見し入植を始めた。入植事業としてポルトガル本国から総督や役人を送ったほか、西アフリカから多数の住民を略取し、奴隷として強制労働につかせた。

奴隷とされたアフリカ人たちは、それぞれ異

なる地域から連行されており、出身部族も、言葉も各々異なっていた¹⁾。したがって、アフリカ人相互においても言葉が通じず、使用者であるポルトガル人の言語を簡略化したものを使わざるを得ない状況であった。

こうしてポルトガル語をベースとしながら、単語や発音、文法の一部にアフリカの言語（バントゥー系言語）を取り入れたクレオール²⁾（Creole）（あるいはクリオウロ（Crioulo））が形成されるようになった。

異なる文化の人々の出会いは、新しい言語を創出しただけでなく、通婚によって混血の人々

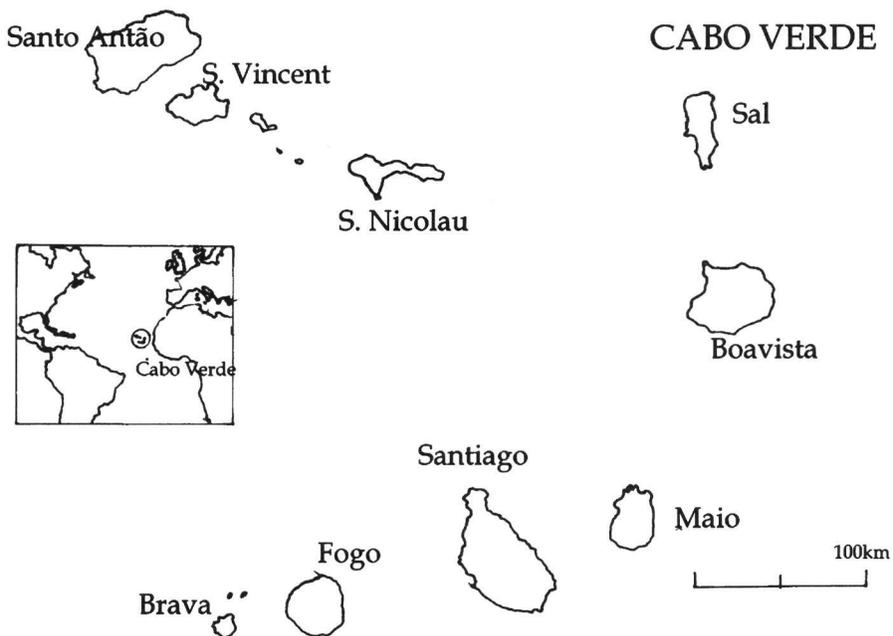


図1 カーボ・ヴェルデの位置

が生み出された。現在のカーボ・ヴェルデの人口は40.8万人(2002年)で、その民族³⁾構成は71%がクレオールと呼ばれるアフリカ人とポルトガル人の混血であり、アフリカ人28%、ポルトガル人などのヨーロッパ人1%となっている。

カーボ・ヴェルデの文化は、アフリカ文化とポルトガル文化が混ざり合った独特の色彩をはなつ。モルナ *morna* といわれるカーボ・ヴェルデ音楽は世界的に有名であるが、音楽やダンスだけでなくとどまらず、農業、町の景観、生活習慣のあらゆる場面で、アフリカ文化とヨーロッパ(ポルトガル)文化の混淆が見られる。

旧宗主国であるポルトガルとの経済的なつながりも深く、植民地時代から現在に至るまで、カーボ・ヴェルデを流通する商品は、ポルトガル製が多い⁴⁾。また、資源にも恵まれず、産業も発達していないこの国では、出稼ぎによる送金が収入の重要な部分を占めており、多くのカーボ・ヴェルデ人が、ポルトガルをはじめとしたヨーロッパへ働きに出ている。

私は、2002年4月24日より5月8日までの15日間、カーボ・ヴェルデにおいて広域調査をおこなった。このとき、現地調査できた島は、サル、サント・アンタオン、サオン・ヴィンセント、サンチアゴ、フォゴ、ボアヴィスタ、マイオの7島である。

本稿では、クレオール文化(混淆文化)として注目されるカーボ・ヴェルデの文化と社会へのポルトガルの影響について、歴史的な経緯と、現地調査にもとづく各島の現状から考察をおこなう。

II 歴 史

カーボ・ヴェルデの歴史の概略⁵⁾ について以

下に記す。カーボ・ヴェルデ諸島⁶⁾ は、1450年代の大航海時代に、ヴェネチア人、ジェノバ人、そしてポルトガル人たちが競って大西洋航海に乗り出すまでは無人島であった。この島の最初のは発見者については諸説あるが、1455年から1461年の間にジェノバ人のノリ Noli とポルトガル人のディオゴ・ゴメス Diogo Gomes がサンチアゴ島に最初に到達したとされる。ついで、ポルトガル人のディオゴ・アフォンソ Diogo Afonso が、サント・アンタオン、サオン・ヴィンセント、サオン・ニコラウの「風上グループ」(後述)の3島を発見した。

1462年に、ポルトガル、ジェノバ、スペインの3国出身の小集団がサンチアゴに入植を始めたが、最終的に国をあげての植民政策に熱心であったポルトガルがこの島の権利を手にした。ポルトガル本国は、入植のための労働力に西アフリカの住民をさらってきて奴隷とし、食糧と綿花の栽培をさせた。その結果1582年までに1万3千700人のアフリカ人奴隷がサンチアゴとフォゴで働かされたという。

その後ポルトガルは奴隷貿易に手を染め、カーボ・ヴェルデは奴隷という「商品」の集散地として、また、大西洋航路の供給地として発展した。

19世紀に入り、人道的見地から奴隷解放運動のうねりが起き、カーボ・ヴェルデにおいても1876年には、奴隷貿易も完全に廃止された。当時の大西洋航路の覇者イギリスは、サオン・ヴィンセント島が港に適する深い湾を持つことに注目し、群島の中心はサンチアゴからサオン・ヴィンセントに移った。しかし、サオン・ヴィンセントは、港に適する地形以外には何の長所もなく、とりわけ土地は乾燥して痩せており、農業生産にはまったく適さない島であった。

群島全体は、気候的にアフリカ本土のサヘル地域に属し、降雨が非常に不安定で絶対量も少ない。1900年代を通じて、数万人規模の餓死者が出る早魃が10年に1度は島々を襲い、人々は飢饉を逃れて当時の宗主国であるポルトガルをはじめとしたヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国へ移出した。

1956年、ギニア・ビサウとカーボ・ヴェルデの独立運動を推進するギニア・ビサウ・カーボ・ヴェルデ独立アフリカ党（PAIGC）が結成され、1975年7月15日、ポルトガルの政変を機についてカーボ・ヴェルデはポルトガルから独立した。当初は前年に独立したギニア・ビサウとの統合をめざしたが、1980年、ギニア・ビサウでクーデターが起こり統合反対派が政権をとったため、両国の関係が一気に悪化した。1981年にはPAIGCがカーボ・ヴェルデ・アフリカ人独立党（PAICV）と名称変更した。独立より長らくPAICVの単一党支配体制であったが、1990年以降は複数政党制が導入されている。

カーボ・ヴェルデの長所は、そのコスモポリタンな精神と教育熱心なところにある。出稼ぎや移民が重要な「産業」の一つでもあることから、語学教育には現在も熱心である。一人当たり国民所得（GNI）は1,340ドル（2001年）と低所得国に属する。海外からの送金のせいか、所得のわりに暮らしぶりは落ち着いている。

III 9島の概要

カーボ・ヴェルデは15の島から成るが、常時人が住んでいるのは9島だけである。9島は、アフリカ大陸から吹きつける風を基準に、風上グループ Barlavento と、風下グループ Sotavento の大きく2つのグループに分けられ

る。前者には、サント・アンタオン、サオン・ヴィンセント、サオン・ニコラウ、サル、ボアヴィスタの5島が属し、後者は、マイオ、サンチアゴ、フォゴ、ブラヴァの4島である。

風上グループは、大陸から吹く乾いた風（11月から3月にはサハラ砂漠からハルマツタンと呼ばれる砂嵐が吹きつける）によって著しく乾燥するが、風下グループは大西洋からの南西風によって風上グループよりは降雨に恵まれる。しかし、群島全体を通じて深刻な早魃に何度も襲われており、歴史的にも多数の餓死者が出た⁷⁾。

カーボ・ヴェルデ諸島は、すべて海底火山が噴火し隆起してできたものである。西端の火山島フォゴ（最高峰は2,829メートル）は最も新しく、2～3万年まえに成立したという。一方、東側のサル、ボアヴィスタ、マイオの3島は、年代的に数十万年古く、かつての火山が風雨に削られて現在のような平坦な地形におさまった。

以下に各島の概要を述べる。

サント・アンタオン Santo Antão

火山島で起伏にとみ、降雨にも恵まれる。石造りの灌漑設備による農業を行い、サトウキビ、ヤム、キャッサバ、サツマイモ、バナナ、パパイヤ、ココナツ、マンゴー、アーモンドを栽培している。サトウキビからとれる蒸留酒（rougue）が特産品であるが、島内消費が主である。漁業も盛んである。

サオン・ヴィンセント São Vincente

群島中、2番目に大きい島で、19世紀には大西洋航路の重要な供給港として発展した。イギリスの船舶が多く立ち寄り、現在もポルトガル人だけでなく、イギリス人、フランス人などの白

人が多く住む。ヨーロッパの影響を受けた音楽(morna)、絵画、織物、クレオール語でかかれた文学など独自の文化を世界に向けて発信している。

サオン・ニコラウ São Nicolau

火山島で降雨があり、コーヒー、サトウキビなどの農業を行っている。カーボ・ヴェルデ諸島の中で最初にローマ・カトリックの神学校が建設され(1866年)、布教の中心地となった。イタリアとの関係が深く、この島の女性はイタリアアヘメイドとして出稼ぎに行くケースが多く、他の島では男性が出稼ぎの中心であるのと対照的である。漁業もおこなわれ魚の缶詰工場がある。

サル Sal

島名は「塩」を意味し、塩田がある。平坦で乾燥した土地である。以前は無人島に近かったが、1939年より国際空港が建設され、ビーチに観光客が来るようになった。

ボアヴィスタ Boavista

群島の最東に位置し、最もアフリカ大陸に近い。島は平坦だが砂丘がある。1620年、イギリスが塩田を開拓した。現在は観光開発が進んでいて土産物屋も多い。ホテルでの表示は英語、ポルトガル語の他にイタリア語があった。

マイオ Maio

19世紀、ブラジル向けに塩を輸出していたときがある。島は平坦で降水量は少ないが、ヤギなどの家畜を飼い、アフリカ式の農業が行われている。

サンチアアゴ Santiago

群島中最大の島で、首都(プライア praia)がある。標高1392mの山があり、降雨にも恵まれる。ポルトガル人による発見後、最初に入植が進んだ。文化、言語、生業様式などさまざまな点でアフリカの影響が強い。群島中、最も人口が多く(全人口の半分近くが集中)失業者も多い。移民を多く輩出している。

フォゴ Fogo

島名の意味は「火」である。標高2829mの活火山島で、最近では1995年に噴火した。カルデラ内は湿気があり、ブドウ畑などの農業が盛んである。島は、起伏にとんだ地形の観光地でもある。

ブラバ Brava

人が住む群島中、最小の島である。降雨に恵まれ緑が多い。19世紀には捕鯨船が頻繁にこの島に立ち寄り、若者を船員としてリクルートした。アメリカへの移民が多い。

IV ポルトガル文化の影響

ポルトガル文化の影響は、言語だけでなく、人々の生活のあらゆる場面に行き渡っている。

まず、町のプランは教会を中心にその正面に四角いプラサ(広場)が設定され、プラサからまっすぐ四方に石畳の道路が伸びている。その道路沿いに四角い家屋が並ぶ。この町並みを特徴づける「四角」「石」というキーワードにポルトガル文化の影響が強く出ている。対するアフリカ的な文化は、「丸」と「木または土」といった要素で表出されるからだ。

伝統的なアフリカの家は丸く、窓も無い場合が多い。そして、集落のプランは丸い広場ある

いは集会場から放射状に赤土の道が伸びている。家屋の壁は土あるいは牛糞を混ぜた土で、壁の中には木を埋め込んである。小屋のまわりのフェンスや家畜囲いのフェンスは木、とくにアカシアなどの棘のついた木で作る。

ところが、カーボ・ヴェルデの道路と家は石造りである。幹線道路も石畳で、雨が降るとタイヤがすべって車の運転が危ないとも聞く。舗装道路がないのが不思議だが、島の人々は「舗装道路だと暑さでタールが溶けてしまうから」という。本当のところは、舗装する費用がないかららしい。家畜囲いも石を組んで作ってある。

サント・アンタオンの灌漑設備も石造りだった。100年ほど前のポルトガル植民地時代に作られたものだというが、地下水を風車で汲み上げて、集落の中心の水場から、山の斜面につくられた村の畑全体に水が行渡るように設計されている。水路、畑の境界、橋すべてが石で作られており、今日も立派に機能している。

また、「カフェ」といって、畑仕事をしている親のもとに、子どもが昼食を届ける習慣がある。バスケットの中に、ライスとカチューパという郷土料理（シチュー）と水筒を綺麗に詰め込んだ弁当を、裸足の子どもが石畳を通して畑まで運んでいく。これもポルトガルの風習に由来するという。

現在、テレビが各家庭に普及しているが、放映されている番組はポルトガルのものばかりである。カーボ・ヴェルデの国営放送は夕方数時間放送されるだけだ。今日のカーボ・ヴェルデ人はポルトガルのホーム・ドラマやポルトガルのタレントが出演するクイズ番組などのバラエティを暇さえあれば観ている。

このようにハードからソフト面まで、あらゆるレベルでポルトガル文化が浸透している。

V 移民国家

カーボ・ヴェルデから流出する移民

資源に恵まれず、降雨量も少なく慢性的な早魃に苦しむこの島国の主な産業は「移民」である。カーボ・ヴェルデが獲得する外貨の30%は、出稼ぎ移民からの仕送りによるものである。

歴史的には、19世紀にブラバやフォゴに立ち寄った捕鯨船に船員としてリクルートされた島の若者たちが、アメリカに多く住み着くようになったのが移民の始まりであり、その子孫は現在20万人を超える。1922年にアメリカの法律が改訂されて移民に厳しくなると、ポルトガルをはじめとしたヨーロッパがおもな移民先となった。

戦後、ポルトガルへは5万人近くが移出し、イタリア1万人、ルクセンブルクとフランスへ1～1.5万人、オランダへ8千～1万人が移民として流出した。このほか、イギリス、スペイン、スウェーデン、さらにブラジル、アルゼンチンなどの南米にも多数カーボ・ヴェルデ移民が住んでいる。これら、海外に住むカーボ・ヴェルデ人は約35万人といわれる。

海外に住むカーボ・ヴェルデ人第1世代は、まず、家族を故郷に残して単身で出稼ぎに行く。そのうち、家族を移民先の国へ呼び寄せるが、「退職後のために」、せつせと親戚に送金しては故郷に家を建てる。現在、カーボ・ヴェルデは住宅の建設ラッシュだ。しかし、第2世代はもちろん、第1世代すらも島に戻ってくるとは限らない。こうして、主のいない巨大な家屋だけが、カーボ・ヴェルデの島々に次々と建てられている。

ポルトガルへ流入する移民

ポルトガルに視点を移すと、1974年以降ポルトガルへの移民が急増した。これは、この年に起きた「カーネーション革命」によってサラザール独裁体制が終結し、アフリカの旧植民地が次々と独立を果たし、ポルトガルに住んでいたアフリカ人が「在住外国人」となったからである。

1998年のポルトガルにおける外国人数は17万7千774人（うち95%が就業者）であり、総人口の1.8%を占めていた（図2）。この外国人のうち、アフリカ出身者は8万2千467人（46%）である。

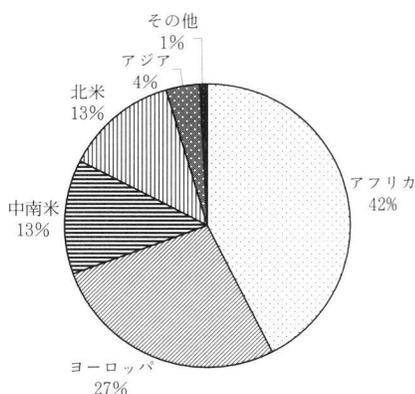


図2 ポルトガル居住外国人数（1998年）
N=177,774

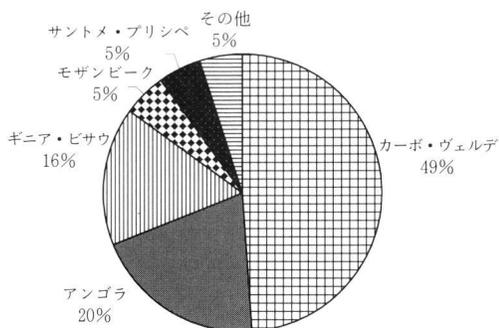


図3 ポルトガル居住外国人のうちのアフリカ出身者の割合（1998年）
N=82,467

ポルトガルに住んでいるアフリカ出身者は、国別に見ると、カーボ・ヴェルデ、アンゴラ、モザンビーク、ギニアビサウ、サントメ・プリシペなど、旧ポルトガル植民地である（図3）。これらアフリカ諸国の中でも、カーボ・ヴェルデ人は約半数を占めており、ポルトガルとカーボ・ヴェルデのつながりの深さをうかがわせる。

これは、先述したように、カーボ・ヴェルデにこれといった産業も資源もなく、人的資源の放出である「移民産業」がこの国にとって重要となっている事情による。また、ポルトガルの側にも、「カーボ・ヴェルデ人は他のアフリカ人に比べ、最もインテリジェンスが高く、信用できる」と評価するポルトガル人が多いことによる。

いずれにせよ1998年のリスボン博開催にあたって、リスボンでは建設現場での労働者を大量に必要としたことが、移民の流入を招いた。また、博覧会閉会後も、EUでの就労を目指す外国人が、比較的入国が簡単なポルトガルをEUへの入り口として、最初の入国先に選んでいる傾向がある。

合法移民のほか、25万人とも推定される非合法移民が多数ポルトガルに居住しており、首都リスボンとその周辺にアフリカ系住民の居住地は集中している。リスボンの衛星都市の1つであるアマドーラ市では、全人口の77%がアフリカ系住民で占められ、とくにカーボ・ヴェルデ人はこの市の人口の57%にもものぼるといわれている（池，2001）。

このようなアフリカ人、中でもカーボ・ヴェルデ人がポルトガルの社会や文化に及ぼす影響は、今後、無視できないものになるであろうことは想像に難くない。

VI おわりに

カーボ・ヴェルデの混淆文化は、「土着の」文化がないところで始まったという大きな特徴がある。アフリカ文化が基本にあるというより、アフリカの記憶をもとに、ポルトガル人との文字通りの混血を通じて、カーボ・ヴェルデはまったく新しい別の文化を築いてきたのである。この根無し草のようにみえる状態は、今日のグローバリズムを先取りしており、「ホモ・モビリタス（移動するヒト）」である人類の本領を発揮しているともいえる。人を移動させる原動力となっているものは、今日の資本主義の世の中にあっては、「先進国なみの生活」「いい暮らし」への希求以外にないであろう。今後は人間の欲望と移動の果てに注目し、混ざり合い、変容する社会と文化のダイナミクスを追求していきたい。

註

- 1) 南北アメリカ大陸へも大量の奴隷が移入され、スペイン支配地域だけでも300万人の人間がアフリカ大陸（おもに西アフリカ）から連行された。その際、数において多数派である奴隷側が結束して反乱を起こすこと恐れられた支配者は、奴隷同士の言葉が通じないように、アフリカの別々の土地から少しずつ混ぜて奴隷を買い入れたという（田中、1999）。
- 2) ピジンとクレオールの違いについて、「ピジンは英語を芯に出来たもの、クレオールはフランス語などのロマンス系の言語がもとになって出来たもの」という慣用が根づよい。しかし、英語やロマンス語以外の言語でも、ありとあらゆる場所で混淆はすすんでおり、その混ざり方の違いによって、ピジンとクレオールを分ける言語学者もいる。
田中（1999）によると、「クレオール語とは、全く文法構造のちがう言語を母語とする話し手どうしが出会って、そこで話を通じるように、おたがいに工

夫しあってやりとりしているうちに、最終的に生まれた新しい言語」であり、ピジンは、クレオールに至る途上の段階の言語であるという。

たとえば、日本人が、発音と言葉の順番は日本語のまま、単語だけ英単語を混ぜて話すと、これはピジン・イングリッシュになる。母語を基本にしているからである。一方、クレオールの場合は、話し手にとって母語とは文法的にも全く異なる新しい言語である。

ただし、実際にクレオールが生成される状況は、2者が対等な立場ではなく、「主人と奴隷」などの非対等な立場で出会う場合が歴史的に多かった。したがって、2つの言語が対等に混ざり合うのではなく、支配者側の言語が、より単純化された「劣った」言語へと変形するという見方が、主流であった。

今福（1991）は、ピジンは、共有する言語を持たない複数の集団が、交易等の目的で継続的に接触を繰り返す際に、相互のコミュニケーションの必要性からあみ出される一種の簡略化された言語であると定義している。そして、クレオールは、いわばピジンがネイティブ・スピーカーを獲得したときに発生すると考えている。ピジンとクレオールの決定的な違いは、クレオールは母語であるのに対し、ピジンを母語とする人はいないという点であるという。

なお、クレオールとは、語源的にはポルトガル語の「クリアル（育てる）」とそれから派生した「クリオリウ（新大陸で生まれた黒人奴隷）」に由来する（Holm 1988）。

- 3) 言語的、文化的にはっきり区別できる「民族」ではないが、英文においてしばしば、**race**、あるいは**ethnic group**と表記されている。これらは、ラベリングされたカテゴリー上の区分であって、社会的な階層やグループにつながるものではない。
- 4) ワイン、ミネラルウォーターなどの飲み物、また、牛乳、ヨーグルト、チーズ、バターなどの乳製品、缶詰や調味料などの食品一般、シャンプー、石鹸、洗剤、衣服などの日用品や衣料もポルトガル製がほとんどだった。その他の製品もほとんどがヨーロッパ製であり、スーパーなどの売られているものうち私が見たカーボ・ヴェルデ製品は、いわしの缶詰だけだった。

- 5) カーボ・ヴェルデの歴史については, Wilson and Irwin (2001), Lobban and Lopes (1995) Carreira (1984) を参考にした。
- 6) カーボ・ヴェルデという名前の由来は, この群島自身にあるのではなく, アフリカ大陸側のセネガルの, カーボ・ヴェルデ (緑の岬) という岬から来るのである。15 世紀の大航海時代の幕開け時に, ポルトガルは, アフリカ南下を試みていたが, 北アフリカを占める砂漠に閉口し, ここを通過することは不可能と考えていた。それが, 1444 年, 北アフリカのサヘル地方を南下しきったセネガルで, 緑に覆われた岬を発見し, 喜びを持って「緑の岬」と命名した。この「緑」の発見が, それ以降のポルトガルのアフリカ南下を押し進め, 大陸南端の喜望峰発見へと繋がっていくのである (安部, 1994)。
- 7) たとえば, 18 世紀の記録によると, 旱魃は 1719 年, 1746 年, 1748 年, 1750 年, 1754 年, 1764 年, 1774 年から 1776 年, 1789 年, 1790 年と常に飢饉にさらされていたことがわかる。また, 旱魃にともなう餓死者は, 全人口の 10 ~ 40% に達したといわれている (Lobban. and Lopes 1995)。

引用文献

- 安部真穂 1994 『波瀾万丈のポルトガル史』, 泰流社。
- Carreira, Antonio 1984 *Cabo Verde*, Ulmeiro, Lisboa.
- Holm, John 1988 *Pidgins and Creoles*, 2 vols., Cambridge University Press, Cambridge.
- 池 俊介 2001 「第 23 章 外国人労働者」, 村上義和, 池俊介編『ポルトガルを知るための 50 章』, 87 頁-89 頁, 明石書店。
- 今福龍太 1999 『クレオール主義』 青土社 (2003 年 加筆して筑摩書房より刊行)。
- Lobban, R. and M. Lopes 1995 *Historical Dictionary of the Republic of Cape Verde*, the Scarecrow Press, Lanham, Md., and London.
- 田中克彦 1999 『クレオール語と日本語』 岩波書店。
- Wilson, C. and Irwin, A. 2001 *Cape Verde Islands*, Bradt, England.

【付記】 本稿は, 2001 年度名古屋学院大学長期在外研修による研究成果の一部である。